

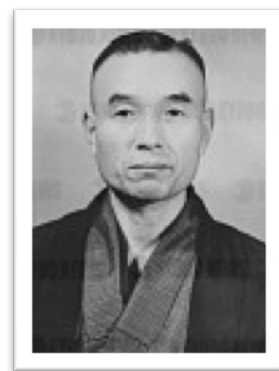
## 『ざる碁』と細川千仞九段

大和田囲碁同好会会長 成田 滋

1951年から54年にかけて、初級者向けの『ざる碁』という36冊の棋書を刊行した棋士に細川千仞九段がいます。日本棋院関西総本部に所属し、後に石井邦生九段らを育てた方です。1951年頃といえば、アマチュア向けの適切な指導書が少なかったようです。『ざる碁』の創刊号には次のような文章があります。

「世に囲碁の良書は数多く刊行されていますが、ざる碁党の友人となるべき初学者用のものが少なく、ここに初学者教授用のテキストとして本書を毎月発刊することにいたしました」「碁の生命である娯楽を旨とし、実用、簡潔、格言を主に編集することにより、興趣を覚えつつ、上達の資に充てていただくことを念願するものです。」

当時、細川千仞氏は七段でした。その頃囲碁人口は200万とも300万ともいわれていました。細川七段は、この人口をさして、「そのほとんどがざる碁党であることを思っていたとき、私はこれらの方々と共に囲碁を楽しむことがいかに意義深いことであるかを考えさせられます」と述懐しています。

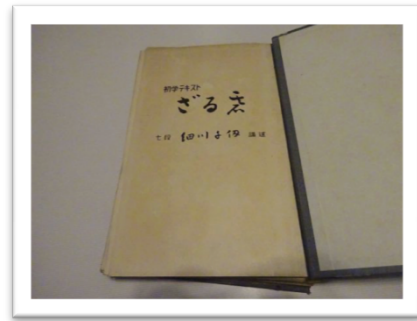


細川千仞七段

『ざる碁』のなかで繰り返して述べているのは戦いのコツです。アマチュアの友たらんとした細川七段は、ざる碁の人々に対する解説が実にユーモラスでありました。例えば、弱い石を評して、「これはなかなか治らぬ病人をかかえている医者のようなもので、大事にすればいつまでも実入りになる」とか「ここは、ぼん抜き150目と申し上げたい」といった調子です。喩えを用い、大袈裟に表現することによって事の重大さを伝えようとするのです。

「碁では何が一番大切なことであるかと問われたら、私は即座にアツク打つと答えましょう。」高段者ともなれば、いかにアツク打つか、相手にはアツクさせまいと苦心するものです。ですが、初級の人々にはなかなかこれが難しい問題です。

細川七段の有名な言葉に「碁は断にあり」がありあます。これはアツミとウスミの諸刃の剣となる表現です。アツミとは厚壮な形、堅固な備えで、その反対がウスミ、すなわち薄弱な形です。「これを人に例えれば健康な体はアツミ、病身、蒲柳（ほりゅう）の質はウスミと申されましょう。」地は誰もが容易に数えられますが、アツミは数えられません。そこが初級者にはピントこないの、ついつい現ナマの地を取って安心しがちなのです。



細川七段はアツミを説明しながら、人生を引き合いにします。

「金もうけとなれば、何はさておいてもあくせくと飛び回る。一日休養して心身の疲れを癒すということは、何だか損をするような気がする。歯の治療ものびとなり、腹の養生もとかくなおざりになる。これも世知辛い世相のせいだけではありますまい。」

「碁は戦いであります。戦う者は先ず頑健でなければなりません。やせ細った体では相撲はとれません」、「とかく初級者は地を急いで取りたがる。一手手入れをしておけば完全であるものを、そこを衝かれて追い回され、さては折角取った地も踏み荒らされます。一つ連絡しておけば盤中安泰なものを、そこを切られて上も下も散々な目にあわされます。敵の地は大きく見えて、それに愠気を起こして飛び込み、辛うじて眼だけはできて、周りは鉄壁だらけで、後はどうにもこうにも打てません。」

体が頑強でなければならぬ、というのもアマチュアには気取りがなく、親しみやすく、分かりやすい解説です。このように細川七段は、世のザル碁党へ暖かい励ましをかけるのですが、最後に力強いエールも送るのも忘れません。

「地取り碁、事勿れ主義、ヌルイ棋風の方はいませんか。安易な道を選ぶ人がなんと多いことでしょうか」、「新しい工夫、棘の苦しみ、切って切って切りまくるケンカ度胸、劫でござれ一歩も譲らぬこの意気、この戦いのコツを体得せずしては真の碁の妙味は分かりませんまい。」

(222年7月22日)